
医療人文学の構築とルーブリック評価の開発

—専門基礎科目「人間と文学」文学精読試案：森鷗外『牛鍋』を例として—

石 垣 明 子

要約

「医療人文学」という名称は、欧米の医学教育プログラムで重要な位置を占めている“medical humanities”を訳したものである。日本では未開拓な分野であり、その教育方法について国内の先行研究は少ない。本稿では、医療保健学部専門基礎科目である「人間と文学」の文学精読を通して、医療人としてどのような能力を涵養することができるのか、またその能力をどのように評価するのかという二つの課題を本稿のテーマとし、森鷗外『牛鍋』をその例として、指導試案とルーブリックの策定を試みる。

キーワード：医療人文学 文学 ルーブリック評価 medical humanities

1. 医療人文学における文学精読に期待される効果

医療人文学は、欧米の医学教育プログラムでは不可欠な学問領域として位置づいているが、日本においては学問領域として確立されていない。医療人文学を担当する教員の専門領域は言語学や社会学、歴史学、哲学などその背景は様々であり、一口に医療人文学と言っても扱う内容は多岐にわたる。

一方で、文部科学省の高等教育局医学教育課によって21世紀医学・医療懇談会第1次報告^(注1)として平成8年12月にまとめられた『21世紀の命と健康を守る医療人の育成を目指して』の「21世紀における医療人育成の考え方」に6つの項目が挙げられており、その中で医療人文学に期待する内容として次のような2項目が挙げられている。

「2. 人間性豊かな医療人：医療人には、幅広い教養を持った感性豊かな人間性、人間性への深い洞察力、倫理観、生命の尊厳についての深い認識などを持つことが強く求められている。医療人育成における人間教育、教養教育の重視を徹底する必要がある、人間的に成熟し幅広い教養教育を修得した後に、医療に関する専門的な教育を行うことも考えられる。」（下線 石垣）

「6. 地球人として活動する医療人：21世紀においては、国際協力を含め、現在以上に地球規模で医療人が活動する機会が増大することを踏まえた医療人の育成が求められる。」（下線 石垣）

このような文部科学省の高等教育局医学教育課の報告を踏まえると、医療人文学の目指すべきゴールとして「幅広い教養と感性豊かな人間性を育み、人間性への深い洞察力を涵養し、地球規模で医療活動できる人材を育成すること」と集約することができよう。特に文学については、自身が経験し

たことがないことであっても、文学の精読を通して人間性への深い洞察力を涵養することができる。

このことについて、2011年9月6日に発行された米国国立癌研究所の『NCI Cancer Bulletin』で、ワシントンD.C.にあるNCI (National Cancer Institute) の職員で現在は医療分野のフリーランスライターであるElia Ben-Ari氏は「医療の技：物語と人文学を取り入れた医学教育」と題して医療人育成における文学精読の意義について次のように述べている^(注2)。

「ジョージ・ワシントン大学 (GWU) では医療人文学のプログラムの一環としてこの小説 (『The Use of Force^(注3)』) についてのディスカッションが行われている。広義では、医療人文学には、人文学、社会科学、および医学教育や医療業務に適用される芸術が含まれる。物語に基づく医療 (※narrative-based medicine (NBM) :患者との対話や人生に基づく全人的医療アプローチ) として知られている関連のある学問分野では、医療を背景においた内省的記述や、詩、フィクション、エッセーや体験記など、いわゆる‘物語’の精読にとりわけ重点を置く。人文学や物語に基づいた医学教育へのアプローチの提案者は、文学や芸術を学ぶことで、さらに人間性豊かな医療ケア (最終的にはより効果的な医療ケア) にとって不可欠な観察、分析、情緒共有や内省のスキルが磨かれ育成されると主張している。」(下線 石垣)

このように、文学の精読を通して、幅広い教養を持った感性豊かな人間性を育み、人間性への深い洞察力の涵養を期待することができよう。

2. 読解力ルーブリックの策定の意義

一方で、残念なことに全ての学生に文学を読み解くだけの力があるわけではない。2000年から3年ごとに実施されている、経済協力開発機構 (OECD) の PISA 調査 (生徒の国際学習到達度調査: Programme for International Student Assessment) の読解力調査^(注4)では、文章を解釈して分析し、根拠を踏まえて論理的に他者に説明する力が十分でないことが指摘されている。

また、PISA 調査は15歳児に行う調査であって、上記のような状況を踏まえ高等学校では論理的に思考して伝える力を強化すべく、現行の学習指導要領でも配慮がなされている。しかし、その成果が不明なまま高校生は大学に入学しており、実際のところ大学で読解力や文章力支援のためのリメディアル教育を実施している大学は多い。

さらに大学には、このくらい読解力が必要であるといった指針が特にあるわけでもなく、大学生の読解力の必要性について著した本も無いのが実情である。そのため、本稿では大学生の読解の共有ルーブリックとして、アメリカのAAC&U (米国大学協会: Association of American Colleges & Universities) が複数教育機関間で活用するために開発し、提供しているVALUE Rubricsと呼ばれる共用ルーブリックを^(注5)活用することにする。

表1^(注6)は現在AAC&Uが提供している16のルーブリックで、そのうちの 하나가表2^(注7)に示した「読解 (Reading)」のルーブリックである。AAC&Uは、このルーブリックをそのまま使用せず、授業の形式や状況に合わせて指導者が使いやすいように形式を変えたり、加除したりして活用することを推奨している。

表1 AAC&U によるアメリカの大学の VALUE Rubrics

カテゴリー	提供されているルーブリック
知力・実践力 (Intellectual and Practical skills)	探究と分析 (Inquiry and analysis)
	批判的思考 (Critical thinking)
	創造的思考 (Creative thinking)
	文章によるコミュニケーション (Written communication)
	口頭によるコミュニケーション (Oral communication)
	読解 (Reading)
	定量的分析能力 (Quantitative literacy)
	情報リテラシー (Information literacy)
	チームワーク (Teamwork)
	問題解決 (Problem solving)
個人ならびに社会的責任 (Personal and Social Responsibility)	地域と世界に対する市民の理解・能力 (Civic knowledge and competence-local and global)
	異文化理解・能力 (Intercultural knowledge and competence)
	倫理的推論 (Ethical reasoning)
	生涯学習のための基礎能力 (Foundations and skills for lifelong learning)
	グローバルラーニング (Global learning)
統合的・応用学習 (Integrative and Applied Learning)	統合的・応用学習 (Integrative and applied learning)

表2 読解の共有ルーブリック (Reading VALUE Rubric)

	最高レベル 4	3	中間レベル 2	標準レベル 1
1 理解	授業の課題以上に、あるいは作者が明示しているメッセージ以上に、文脈や文全体、結末から言外の意味を見出している。(例えば、興味関心からより広い論点に言及したり、作者のメッセージや表現に異議を唱えていたりする。)	文章、一般的な背景知識、そして(あるいは)より複雑な作者のメッセージや気持ちについて推論を導き出すために、作者の背景について特別な知識を用いている。	作者のメッセージを理解するに足る(例えば、文や段落の構造や調子)文章の特徴を評価している。文脈や文の趣旨について基本的な推論を導きだしている。	適切な語彙を他の言葉に置き換えたり、文章が伝える内容を要約したりして理解している。
2 様式 (ジャンル)	モニタリングをし、読解ストラテジーを駆使し、文章特有の総称的表現を基に予想を立て、文章とその様式(ジャンル)を結びつけて考える能力を使っている。	様式(ジャンル)の特徴や慣習をはっきり述べ、文章と様式を関連づけている。	実験的であろうと意図的であろうと、様々な様式(ジャンル)の読書体験を反映している。	生産的にあるいは、無分別に、様々な読解の課題に対して、なんとなく様式(ジャンル)についての知識を利用している。
3 文章との関連 (文脈に沿った説明)	文章の内容や結論によって、その文章が学問的に意義があり、様々な学問分野と関連性があることを評価している。	学問分野の基礎的知識を増やし、重要な疑問を持ち、それを探究するために、学問的な文脈の中で文章を用いている。	文章の時事的で世界的な知識としての意味と可能性との関連を理解している。	単位の取得のために、情報と(作者の)考えを学びながら、課題文の文脈を意図的に読み、正しい答えを探そうと文章にアプローチしている。
4 分析 (部分と全体との相互作用について説明)	文章と学問の外にある、知識あるいは洞察を高めるために、アイデアや文章構造、その他文章の特徴と関連したストラテジーを評価している。	全体として文章の高度な理解をどのようにサポートしているのかを評価するために、アイデアと文章構造、その他文章的特徴との相互の関係がわかる。	全体として文章の基本的理解にどのような貢献しているかを考えながら、効果的あるいは非効果的な推論あるいは文学的な特徴を示す文章の部分あるいは局面的な関係を認めている。	課題で求められている質問に答えるのに必要な(例えば、趣旨や構造、「アイディア」間の関係性など)文章の局面がわかる。
5 解釈 (行間にわたる文章の理解)	適切な認識論的視点で読みだけでなく、さらに結末の続きを考え、あるいは読者どうしで文章の続きを考えているという証拠(根拠)がある。	特にその人の学問分野あるいは読者が属しているコミュニティに対して、多様な読み方と広い解釈のストラテジーを用いて理解していることを明確に述べている。	読解内容に合わせて解釈ストラテジーを選び、意図的に読んでいる。	課題を明確に理解するために、指導者の力を頼りながらも、読解の目的を理解することができ。
6 読者としての声 (高等教育機関の討論会への参加)	学問上の会話を促進し維持するように、自主的、理論的、倫理的に文章について議論している。	進行している議論を深めたり、高めたりするために(理解や質問を通して)文章について詳しく述べている。	(授業時のような)構成された会話の中で、共有された基本的な文章理解に資するように、文章について議論を展開している。	作者の意図を見失わず、課題と作者の意図とを関係づけながら、文章についてコメントしている

そこで本稿では、医療保健学部の専門基礎科目「人間と文学」の授業内容に合わせ、表2の読解のルーブリックのうち、「3 文章との関連」「4 分析」「6 読者としての声」を活用して、指導案及びルーブリックを策定することとする。

3. 「人間と文学」におけるルーブリックの策定とシラバス

「人間と文学」の「授業概要」と「成績評価の方法・基準」については、表3のようにシラバスに掲載している。このままでは、どの力をどのような方法で評価するのかがわかりにくい。そこで、授業概要をもとに到達目標を定め、これに評価方法と評価比率を対応させたものが表4である。さらに、表4の「演習課題（論文式テスト）」「ディスカッション」「プレゼンテーション」を表2の「4 分析」「6 読者としての声」「3 文章との関連」にそれぞれ対応させたものが表5となる。

「A 演習課題（論文式テスト）」では、部分と全体との相互作用について分析的に考え、表現（口頭あるいは文章）することについてS～Cの4段階のパフォーマンスで示した。また、「B ディスカッション」は討論の参加度のパフォーマンスをS～Cの4段階で示し、「C プレゼンテーション」は文章との関連について、文脈に沿ってどのくらいの説明ができるのかをS～Cの4段階で示している。具体的な作品との関連は次節で詳細に説明する。

表3 シラバスに掲載している「人間と文学」の「授業概要」と「成績評価の方法・基準」

授業概要	人間は、人間らしく生きたいと願い、さまざまな文化を形成してきた。人は固有の文化の中で、「人間らしさ」を学び、自分らしい生き方を見つける。一方で、文化は人々の意識の変化にそって変容してゆく歴史的な存在でもある。そこで、本授業では、日本の文化・文学を取り上げ、われわれ日本人の意識がどのように形成されてきたかについて歴史的に考察する。多くの文学作品に触れることを通して、文化や人間に対する理解を深め、自己を高める態度を養う。
成績評価の方法・基準	演習課題：50%、ディスカッション参加：30%、プレゼンテーション：20%

表4 「人間と文学」の到達目標に対する評価方法と評価比率

到達目標に対するパフォーマンス	評価方法	評価比率
① 人間は、人間らしく生きたいと願い、さまざまな文化を形成してきた。人は固有の文化の中で、「人間らしさ」を学び、自分らしい生き方を見つける。一方で、文化は人々の意識の変化にそって変容してゆく歴史的な存在でもあることを理解できている。	演習課題 (論文式テスト)	50%
② 多くの文学作品に触れることを通して、文化や人間に対する理解を深め、自己を高める態度があることを討論によって他者に示すことができる。	ディスカッション	30%
③ 日本の文化・文学を取り上げ、われわれ日本人の意識がどのように形成されてきたかについて歴史的に考察したことを提示できる。	プレゼンテーション	20%

表5 「人間と文学」のルーブリック

科目の到達目標	S (秀)	A (優)	B (良)	C (可)	評価方法	評価比率
① 人間は、人間らしく生きていきたいと願い、さまざまな文化を形成してきた。人は固有の文化の中で、「人間らしさ」を学び、自分らしい生き方を見つける。一方で、文化は人々の意識の変化にそって変容してゆく歴史的な存在でもあることを理解できている。	文章と学問の内に、知識あるいは洞察力を高めるために、アイデアや文章構造、その他文章の特徴と関連したストラテジーを分析評価している。 (16P~20P)	全体として文章の高度な理解をどのようにサポートしているのかを分析評価するために、アイデアと文章構造、その他文章的特徴との相互の関係を理解している。 (11P~15P)	全体として文章の基本的理解にどのよう貢献しているかを考えながら、効果的あるいは非効果的な議論あるいは文学的な特徴を示す文章の部分あるいは局面的関係がわかっている。 (6P~10P)	課題で求められている質問に答えるのに必要な(例えば、趣旨や構造、「アイデア」間の関係性など)文章の部分がわかっている。 (1P~5P)	演習課題 (論文式テスト) (分析：部分と全体との相互作用についての説明)	50%
② 多くの文学作品に触れることを通して、文化や人間に対する理解を深め、自己を高める態度があることを討論によって他者に示すことができる。	学問上の会話を促進し維持するように、自主的、理論的、倫理的に文章について議論している。 (9P~12P)	進行している議論を深めたり、高めたりするために(理解や質問を通して)文章について詳しく述べている。 (7P~8P)	(授業時のような)構成された会話の中で、共有された基本的文章の理解に資するように、文章について議論を展開している。 (5P~6P)	作者の意図を見失わず、課題と作者の意図とを関係づけながら、文章についてコメントしている。 (1P~4P)	ディスカッション (読者としての声：高等教育機関の討論会への参加)	30%
③ 日本の文化・文学を取り上げ、われわれ日本人の意識がどのように形成されてきたかについて歴史的に考察したことを提示できる。	文章の内容や結論によって、その文章が学問的に意義があり、様々な学問分野と関連性があることを評価している。 (7P~8P)	学問分野の基礎的知識を増やし、重要な疑問を持ち、それを探究するために、学問的な文脈の中で文章を用いている。 (5P~6P)	文章の時事的で世界的な知識としての意味と可能性との関連を理解している。 (3P~4P)	単位の取得のために、情報と(作者の)考えを学びながら、課題文の文脈を意図的に読み、正しい答えを探そうと文章にアプローチしている。 (1P~2P)	プレゼンテーション (文章との関連：文脈に沿った説明)	20%

満点を100P(ポイント)としている。Pはポイントの略。

4. 森鷗外『牛鍋』の指導とルーブリック評価

「人間と文学」は15回の授業で、明治期から大正期の13編の短編小説を13回の授業で精読する。その最初の作品が本稿で扱う『牛鍋』である。『牛鍋』（本稿末尾に全文あり）は、陸軍軍医であった森鷗外が明治43年に48歳で著した作品で、物語の概要およびテーマ、指導案、ルーブリックは次のとおりである。

【物語の概要】

物語はある食卓で二人の男女と、女の7つか8つの娘が牛鍋を囲んでいるところから始まる。女は男に酒を注いでやりながら男を見つめ続け、男はひたすら牛鍋の肉をつついている。腹をすかせた幼い娘もその肉を箸でつつこうとするが、男がまだ肉は煮えていないと言うので、娘は肉が煮えるのを待ち続ける。やがて鍋の肉はほとんど煮えるが、男は娘におかまいなくひたすら箸を動かし続ける。ここで一旦、話は浅草公園での猿の話になる。猿は親子であれば少しは遠慮があるものの、基本的には遠慮なく餌をむさぼる親子の親猿の様子が語られる。その後、ひたすら箸で肉をつついていた男の箸がとまる。娘はやっとの思いで肉を箸でつまみ、腹を満たすことができた。男はその様子を見るが、幼い娘をとがめることはなかった。

【作品のテーマ】

作品のテーマは人間の「慈愛」にある。慈愛とは親が子供をいつくしみ、かわいがるような深い愛情を指すが、それだけであれば子を思う猿と変わらない。だが、人間としての「慈愛」には親子の関係を越えた下の者や弱い者にも恵みや心をかけ大切にすることもその精神に含まれ、それが動物と人間との違いであると作者は読者に気づかせようとしている。

本作品の精読を通して、医療人として必要不可欠な「慈愛」の精神を考え、また今日的な意義を見出すことを指導のテーマとしている。

【指導案とルーブリック】

授業では、表5のとおり3つの到達目標を定め、本稿では特に①の到達目標について詳述する。①は演習課題による論文式テスト（口頭あるいは文章）で評価する。知識を問うのではなく、精読によって得られた人間への洞察力を問うのがその目的である。

表5に示すように、演習課題の内容によってパフォーマンスに難易度を設け、第1問は5点、第2問は10点、第3問は15点、第4問は20点としている。②の到達目標はディスカッションで評価し、演習課題（論文式テスト）終了後に実施する。③の到達目標は、予習として準備させる作品に対する各自のイメージを授業冒頭でプレゼンテーションさせて評価する。

表 6 読解ループリックと『牛鍋』の演習課題

科目の到達目標	S (秀)	A (優)	B (良)	C (可)	評価方法	評価比率
① 人間は、人間らしく生きたいと願い、さまざまな文化を形成してきた。人間は固有の文化の中で、「人間らしさ」を学び、自分らしい生き方を見つげる。一方で、文化は人々の意識の変化にそって変容してゆく歴史的な存在でもあることを理解できている。	文章と学問の内にある、知識あるいは洞察を高めるために、アイデアや文章構造、その他文章の特徴と関連したストラテジーを分析評価している。 (16P~20P)	どのようか全体として文章の高度な理解をサポートしているのかを分析評価するために、アイデアと文章構造、その他文章的特徴との相互の関係を理解している。 (11P~15P)	全体として文章の基本的理解にどのような貢献しているかを考えながら、効果的あるいは非効果的な議論あるいは文学的な特徴を示す文章の部分あるいは局面的関係がわかっている。 (6P~10P)	課題で求められている質問に答えるのに必要な(例えば、趣旨や構造、「アイディア」間の関係性など)文章の部分がかわかっていて。 (1P~5P)		
演習課題例 (森岡外『牛鍋』より)	第4 間 『牛鍋』という作品で、森岡外が伝えたかったことを、文章の言葉を使って理由を述べ、それについて自身の考えを述べた上で、今日の時代に含ませてその意義を語ること。	第3 間 「人は猿より進化している」とはどういうことか、文中の言葉を使って理由を述べ、自身の考えも加えて説明すること。	第2 間 なぜ作者は猿のたとえ話を入れたのか、文中の言葉を使って明確に述べること。	第1 間 なぜ男は箸を止めたのか、止めた理由を明確に述べること。	演習課題 (論文式テスト) (分析：部分と全体との相互作用についての説明)	50%
演習課題の解答例	森岡外が人間には利害を超越した慈愛の精神があるのだ、というように伝えている。『牛鍋』という作品で慈愛の精神が人間には備わっている。作品では「人は猿の精神について作品では「人は猿よりも進化している。」というフレーズを2 回繰り返すことで強調している。利害を重んじる昨今にあって、他者のために自己犠牲にするという慈愛の精神の大切さを考える時、本作品の意義の大きさに気づかされる。	人間もまた猿と同様に欲に支配されがちであるが、その欲をコントロールする慈愛の精神が人間には備わっている。作品では男の行動について「親でないのに、たまさか害の運動に娘が成功してもしばはしない。」と他人の幼い娘への慈愛の精神に触れ、猿よりも優れた人間の精神性について語っている。	人は欲望や利害に我を失いがちであり、そのこととは猿とそれほど変わらないということ。「猿の母と子との間に悲しい争奪が始まる。」という言葉で伝えられている。	幼い娘を憐れに思い、肉をとらせてやろうと思ったから。		

満点を100P (ポイント) としている。Pはポイントの略。

表 7 論文式テストの共用ループリック

	S 評価	A 評価	B 評価	C 評価
論文式テスト	A 評価を踏まえ、さらに独創的な視点や観点が認められる。	根拠及び客観的裏付けとなる内容が共に十分である。	主張と根拠はあるが、客観的裏付けが不十分である。	主張はあるが根拠が不十分である。

表6に示すように、演習課題はパフォーマンスの難度によって、4段階の質問となっているが、そのレベルにより表7の論文式テストの共用ループリックをパフォーマンス形式として使用している（詳しくは、石垣明子「大学におけるループリック評価の開発—医療人文学科目における社会人基礎力を涵養するループリック—」『つくば国際大学研究紀要』平成28年3月を参照^(注8)）。

第1問：なぜ男は箸を止めたのか、止めた理由を明確に述べること。

【パフォーマンス形式】特に文中の言葉を引用して述べる必要はなく、自分なりの考え（主張）を述べれば良い。

【模範解答】幼い娘を憐れに思い、肉をとらせてやろうと思ったから。

第2問：なぜ作者は猿のたとえ話を入れたのか、文中の言葉を使って明確に述べること。

【パフォーマンス形式】自分の考え（主張）を、文中の言葉を根拠として引用しながら述べる。

【模範解答】人は欲望や利害に我を失いがちであり、そのことは猿とそれほど変わらないということ。「猿の母と子との間に悲しい争奪が始まる。」という言葉で伝えている。

第3問：「人は猿より進化している」とはどういうことか、文中の言葉を使って理由を述べ、自身の考えも加えて説明すること。

【パフォーマンス形式】自分の考え（主張）を、文中の言葉を根拠として引用し、さらに引用箇所について解釈を加える必要がある。

【模範解答】人間もまた猿と同様に欲に支配されがちであるが、その欲をコントロールする慈愛の精神が人間には備わっている。作品では男の行動について「親でないのに、たまさか箸の運動に娘が成功しても叱りはしない。」と他人の幼い娘への慈愛の精神に触れ、猿よりも優れた人間の慈愛の精神について語っている。

第4問：『牛鍋』という作品で、森鷗外が伝えたかったことを、文章の言葉を使って理由を述べ、それについて自身の考えを述べた上で、今日の時代に合わせてその意義を語ること。

【パフォーマンス形式】自分の考え（主張）を、文中の言葉を根拠として引用し、引用箇所について解釈を加え、さらに今日的な問題を重ね合わせることで自分の主張が正しいことを述べる必要がある。

【模範解答】森鷗外が人間には利害を超越した慈愛の精神があるのだ、ということについて伝えようとした作品がこの『牛鍋』という作品である。このような人間の慈愛の精神について作品では「人は猿よりも進化している。」というフレーズを2回繰り返すことで強調している。利害を重んじる昨今にあって、他者のために自己を犠牲にするという慈愛の精神の大切さを考える時、本作品の意義の大きさに気づかされる。

5. まとめと今後の課題

「医療人文学」は、日本では未開拓な学問分野であり、医療人文学構築の手掛かりとなる先行研究は少ない。そこで本稿では AAC&U の読解のルーブリックや作者が開発した共用ルーブリックを活用して森鷗外『牛鍋』の指導案とルーブリックの策定を試みたが、パフォーマンスをレベル付けするルーブリックを活用すれば、文学の精読を通して人間性への深い洞察力を涵養し、医療人の人間教育をすることは十分可能である。

前掲の文部科学省の高等教育局医学教育課の報告には「医療人育成における人間教育，教養教育の重視を徹底する必要がある，人間的に成熟し幅広い教養教育を修得した後に，医療に関する専門的な教育を行うことも考えられる。」とあるものの，平成 8 年の提言から 20 年以上を経てもなお医療人文学は学問領域として確立されておらず，諸外国の医療人文学に学ぶべきことは多い。今後は医療専門基礎科目の他科目についても AAC&U のルーブリック等を参考に，医療人文学構築のための枠組みを提案するとともに，授業を通じてその成果を検証していきたい。

（いしがき・あきこ メディア社会学科）

注記

- 1) 文部科学省「21世紀における医療人育成の考え方」『21世紀の命と健康を守る医療人の育成を目指して（21世紀医学・医療懇談会第1次報告）』平成8年12月
審議会答申であるが，現在は文部科学省サイトのみからの閲覧が可能である。
- 2) Elia Ben-Ari「医療の技：物語と人文学を取り入れた医学教育」『NCI キャンサー プレティン：NCI Cancer Bulletin：A Trusted Source for Cancer Research News（Volume 8 / Number 17）』13p National Cancer Institute（米国国立癌研究所発行）2011年9月6日号
- 3) 産婦人科医であった William Carlos Williams の短編小説『The Use of Force』を用いたディスカッション。
- 4) PISA 調査における読解力平均得点の経年変化は，2000年は522点で参加31か国中8位，2003年は498点で参加40か国中14位，2006年は498点で参加56か国中15位，2009年は520点で参加65か国中8位，2012年は538点で参加65か国中4位となっている。2015年は参加70か国中8位にとどまっている。
- 5) VALUE RubricsはワシントンD.C. に本部を置く Association of American Colleges & Universities（AAC&U）によって2007年から開始されている共用ルーブリック開発プロジェクトによって開発されたルーブリックである。VALUE は Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education の頭文字を使用した名称で，大学レベルの公平で客観的な学習評価を意味している。定められた手続きを踏めば無料でダウンロードすることができる。
- 6) AAC&U（Association of American Colleges and Universities）“Assessing Outcomes and Improving Achievement Tips and Tools for Using Rubrics” 21p-51p 2010

- 7) AAC&U (Association of American Colleges and Universities) “Assessing Outcomes and Improving Achievement Tips and Tools for Using Rubrics” 33p 2010
- 8) 表7を含む共有ルーブリックについては次の論考で詳述しており、CiNiiで本文を公開している。石垣明子「大学におけるルーブリック評価の開発：医療人文学科目における社会人基礎力を涵養するルーブリック」『つくば国際大学 産業社会学部 研究紀要22』27p-39p つくば国際大学 2016年3月

参考文献

1. 国立教育政策研究所『生きるための知識と技能5－OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2012年調査国際結果報告書』明石書店 2013年12月
2. 国立教育政策研究所『2015年調査国際結果の要約』2016年12月
3. 森鷗外『牛鍋』1910年1月：初出は「心の花」なお、本稿に掲載の『牛鍋』は青空文庫よりダウンロードし、学生が読みやすいように一部現代語に直した。
4. 入部明子『パワー・ライティング入門：説得力のある文章を書く技術』大修館書店 2013年8月

牛鍋

森岡外

鍋はぐつぐつ煮える。

牛肉の紅は男のすばしい箸で反される。白くなった方が上になる。

斜に薄く切られた、ざくと言ふ名の葱は、白い処が段々に黄色くなつて、褐色の汁の中へ沈む。

箸のすばしい男は、三十前後であろう。晴着らしい印半纏を着ている。傍に折檻が置いてある。

酒を飲んで肉を反す。肉を反しては酒を飲む。

男と同年位であろう。黒緋子の半衿の掛かった、縞の締入に、余所行の前掛をしている。

女の目は断えず男の顔に注がれている。永遠に渴しているような目である。

目の渴きは口の渴を忘れさせる。女は酒を飲まないである。

箸のすばしい男は、二三度反した肉の一切れを口に入れた。

丈夫な白い歯で旨そうに嚙んだ。

永遠に渴している目は動くあごに注がれている。

しかしこのあごに注がれているのは、この二つの目ばかりではない。目が今二つある。今二つの目の主は七つか八つ位の娘である。無理に上げたようなお煙草盆に、小さい花

簪を挿している。

白い手拭を畳んで膝の上に置いて、割箸を割って、手に持って待っているのである。

男が肉を三切れ四切れ食った頃に、娘が箸を持った手を伸べて、一切れの肉を挟もうとした。男に遠慮がないのではない。そんならと云つて男を憚とも見えない。

「待らねえ。そりやあまだ煮えていねえ。」

娘はおとなしく箸を持った手を引込めて、待つている。

永遠に渴している目には、娘の箸の空むなしく進んで空しく退いたのを見る程の余裕がない。

暫すると、男の箸は一切れの肉を自分の口に運んだ。それはさつき娘の箸の挟もうとした肉であつた。

娘の目はまた男の顔に注がれた。その目の中には怒も怒もない。ただ驚がある。永遠に渴している目には、四本の箸の悲しい競争を見る程の余裕がなかった。

女は最初自分の箸を割って、盃洗の中の猪口を挟んで男に遣つた。箸はそのまま膳の縁に寄せ掛けてある。永遠に渴している目には、またこの箸を顧みる程の余裕がない。

娘は驚きの目をいつまで男の顔に注いでいても、食べろとは云つて貰われない。もう好い頃だと思つて箸を出すと、その度毎に「そりやあ煮えていねえ」を繰り返される。

驚の目には怒も怒もない。しかし卵から出たばかりの雛に穀物をついはませ、胎を離れたばかりの赤ん坊を何にでも吸ひ附かせる生活の本能は、驚の目の主にも動く。娘は箸を鍋から引かなくなつた。

男のすばしい箸が肉の一切れを口に運ぶ隙に、娘の箸は突然手近い肉の一切れを挟んで口に入れた。もうどの肉もよく煮えているのである。

少し煮え過ぎている位である。

男は鋭く切れた二皮目で、死んだ友達の一入娘の顔をちよいと見た。しかりはしないのである。

ただこれからは男のすばしい箸が一層すばしくなる。代りの生を鍋に運ぶ。運んでは反す。反しては食う。

しかし娘も黙つて箸を動かす。驚の目は、ある目的に向つて動く活動の目になつて、それが暫くも鍋を離れない。

大きな肉の切れは得られないでも、小さい切れは得られる。よく煮えたのは得られないでも、生煮えなのは得られる。肉は得られないでも、葱は得られる。

ア

浅草公園に何とかいう動物をいろいろ見せる処がある。名高い狒々猿のいた近辺に、母と子との猿を一結入れている檻があつて、その前には例の輪切りにした薩摩芋が置いてある。見物がその芋を箸の尖に突き刺して檻の格子の前に出すと、猿の母と子との間に悲しい争奪が始まる。芋が来れば、母の乳房をふくんでいた子猿が、乳房を放して、珍しい芋の方を取ろうとする。母猿もその芋を取ろうとする。子猿が母の腋を潜り、股を潜り、背に乗り、頭に乗つて取ろうとしても、芋は大抵母猿の手に落ちる。それでも四つに一つ、五つに一つは子猿の口にも入る。

母猿は争ひはする。しかし芋がたまさか子猿の口に這入つても子猿をいじめはしない。本能は存外醜態でない。

箸のすばしい本能の人は娘の親ではない。親でないのに、たまさか箸の運動に娘が成功しても叱りはしない。

人は猿よりも進化している。

四本の箸は、すばしくなつて男の手と、すばしくなつて男の手とに

使役せられているのに、今二本の箸はどうとう動かすに

永遠に渴している目は、依然として男の顔に注がれている。世に苦味走つたという質た

ちの男の顔に注がれている。

一の本能は他の本能を犠牲にする。

こんな事は獣にもある。しかし獣よりは人に多いのである。

人は猿より進化している。

(明治四十三年一月)

The building of medical humanities and the development of reading rubrics:
the lesson plan and rubrics : Ougai Mori “the Beef Hot Pot”
on “the human and the literature”

Akiko Ishigaki

The name, “IRYOU JINBUNGAKU”, is the one to have translated “medical humanities” which occupies an important position in the medical-education program in the Europe and America.

In Japan, it is a potential field and as for the way of educating, there is little domestic future research.

At this thesis, in two what ability it is possible to cultivate as the medical care person through the literature perusal of “the human and the literature” which is the on professional basic subject of medical and health care department and also how to evaluate the reading ability, as the example, it tries to make the lesson plan and the rubrics of Ougai Mori “the Beef Hot Pot”.

Keyword: medical humanities, reading rubrics, literature